

### 発行の挨拶

浅草槐の会(あさくさえんじゅのかい)は、浅草寺のご本尊の聖観世音菩薩が、推古天皇三十六年(六百二十八年)三月十八日、隅田川で漁をしていた檜前浜成(ひのくまのはまなり)、竹成(たけなり)の二兄弟によって網得され、槐の木切り株(現在の駒形堂あたり)に安置されたといういわれから「浅草槐の会」と称しました。

浅草槐の会では、浅草の歴史、文化、セミナー、四季折々の浅草など、楽しい浅草情報を、ホームページ、瓦版、などで御紹介いたしておりますが、四季折々の浅草を自由に、楽しく散策していただきたく、地図、歳時、名所、旧跡、を中心に「日本の扉 浅草」を刊行する運びとなりました。今後、浅草の四季に合わせ、年四冊刊行したいと企画しております。浅草の街に暮らす私たちのつくるこの冊子が、皆様の浅草散策のお役に立てば幸いです。

浅草槐の会



日本の扉

# 浅草

浅草槐の会

創刊号

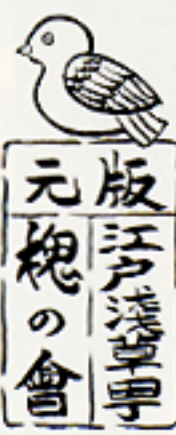
ASAKUSA

The Door Step to Japan

平成十四年壬午

浅草歳時

二月 (睦月) 初詣 浅草名所七福神もうで	三月 (弥生) 十八日 浅草観音現会金龍の舞	四月 (卯月) 八日 浅草春の観光祭 八日 釈尊誕生日(花まつり) 十四日 白鷺の舞	五月 (皇月) 五日 皇の舞 十七、十九日 三社祭 二十五、二十六日 浅草土様の植木市	六月 (水無月) 二十九、三十日 浅草土様の植木市	
七月 (文月) 九、十日 四万六千日 (ほおずき市)	八月 (葉月) 十五日 万霊燈籠供養会 二十七日 隅田川花火大会 三十一日 浅草サンバカーニバル	九月 (長月) 二十三日 彼岸会	十月 (神無月) 六日 浅草秋の観光祭 六日 江戸神輿大会(予定) 十八日 金龍の舞、菊供養	十一月 (霜月) 一、十三、二十五日 酒の市 三日 東京時代まつり 十五日 白鷺の舞	十二月 (師走) 十七、十九日 歳の市 (羽子板市) 三十一日 除夜の鐘(井天山)



お問い合わせ  
〒111-0032 台東区浅草1-36-7  
浅草槐の会事務局  
URL <http://www.asakusa.gr.jp/>  
e-mail [info@asakusa.gr.jp](mailto:info@asakusa.gr.jp)



## 浅草槐の会季刊誌 発刊に寄せて



東京という都会の中で、下町浅草は、  
異空間ともいうべき雰囲気のある街のようです。  
毎日がお祭りのような賑わいを見せる一方で、  
他の繁華街とは違い、安らぎも得られる  
街なのかも知れません。

浅草寺、浅草神社(三社様)の周辺を散策すれば、  
お堂や石仏、歌碑や句碑などが歴史を刻んで並び建ち、また、  
手仕事を伝える職人らが店を構えます。

神仏への祈りに心を洗い、文学の舞台・旧跡をたどり、  
伝承文化である職人技の品々を手に取り、芸能を堪能し、  
味覚を楽しむなどさまざまな魅力であふれる浅草。

その浅草を歩いていただくために、  
地元「浅草人」が案内地図を作ることにしました。  
横町の奥に新たな発見があるかも知れません。  
浅草ファンを魅了する情報発信冊子として、  
お役に立てれば嬉しく思うばかりです。

浅草寺教化部執事 塩入亮乗



## 歳の瀬

江戸の歳の市(その年最後の市)は浅草がもつとも古く、一説によると万治元年(一六五九年)に両国橋が初めて架けられた頃から行われていたと言われている。他の月の市とは違い、新しい歳を迎える正月用品が主となり、後に各地でいろいろな市が立つようになって、江戸一番の大手の賑わいであったという。月日を経るうちに正月用品に羽子板が加わり、他の品々より華やかさが人々の目を引いて押絵羽子板は市の主要商品となり、いつしか市は「羽子板市」と言われるようになった。ものの本によれば、羽子板市は「人より始まって人に終わる」と言われるほどの賑わいであった。

暮れの十七、十八、十九日は、浅草観音様の境内に江戸の情景が展開される。通りから一段高く床を張った「にわか座敷店」が軒を並べ、飾り立てた羽子板には舞台より一段といい男振りの役者衆の顔、顔、顔……。羽子板が今日のように一般に売られるようになる以前は、市が唯一の商いの場。つまり羽子板製作者にとって市は、一年間かけた自慢の腕の見せどころで、私どもの展示場。役者衆の舞台姿を移した羽子板は、一年の舞台の総決算であった。そして同時に、市の日を待ってひいき役者の羽子板を買い求めるのは、江戸っ子の大きな楽しみでもあったのである。

いつの時代からあった習わしか、女の子が生まれた明るる年の正月を「初正月」と言って羽子板を祝って迎え、その羽子板が長じてからはお嫁入り諸道具のお供をするという風習がある。両親、祖父母は品定めの大賑わいだが、当の赤ちゃんは「おまかせ」とばかりにお母さんの腕の中ですやすや、という光景が浅草の歳の市でも見かけられる。こうして選ばれた羽子板は、その家に親から子、そして孫へと五十年、八十年伝えられていく。その伝統の重さこそ、作り手もつとも心しなければならぬことである。

(西山鴻月)



羽子板師 西山鴻月

略歴:本名・西山幸一郎。大正十年浅草生れ。十五歳で押絵羽子板師・倉田雅生氏に弟子入りし、十九歳で独立。戦時中の応召を除いて羽子板作り一筋の道を歩む。東京都知事賞ほか受賞多数。

### 三宅島チャリティー 羽子板オークション

ちばてつや先生をはじめ多数の有名漫画家の皆さんによる「手書き羽子板」のチャリティーオークションを期間中(十七日~十九日)、仲見世入り口で行っております。

## 除夜詣と 初詣

初代中村吉衛門の俳句で、「女房も同じ氏子や除夜詣」また、「観音は近づき易し除夜詣」(高浜虚子)などのように昭和中期くらいまでは「除夜詣」ということばが残っていました。古来、



日本の文化はいわば「日の出、日の入り文化」で、一般には日の出を拝んでからのお詣りを「初詣」と考えられていました。除夜詣は近隣の氏子達が除夜の鐘を聞いて、とくべつ着飾るわけでもなく、いわば綿ぞつき(綿

の衣服、普段着)を着て気軽に地元の氏神様にお詣りに行くことであり、それに対し初詣は蚕(おかいこ)ぞつき、いわば晴れ着を着て日の出を迎えてからお詣りに行くものと、ある意味で区別されていました。

しかし近年、車社会の発展や大晦日夜の交通機関の利便性を含め、除夜の鐘を聞いて少しでも早くお詣りしたいという考えからこの区別もなくなってきました。浅草寺では弁天山の除夜の鐘が鳴るまでは仲見世の通行を宝蔵門付近で一時止めて、鐘と同時に寺の開扉を行い初詣の方々をお迎えするようにしています。また、この時から一月七日までの間の「開運厄除御守護」や五日の「牛玉加持会」(ごようかじえ)の日に限り火防盗難除の「牛玉札」などこの期限限定のお札が授与されています。